

コロナ禍におけるオンライン・キャリア教育企画について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061872

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



コロナ禍におけるオンライン・キャリア教育企画について

金沢大学附属高等学校 72回生担任団

渡會 兼也, 荒納 郁美
金森 久貴, 赤松 信弘

コロナ休校期間から学校が再開した6月から8月にかけて3年生を対象にしたオンライン・キャリア教育を企画・運営した結果を報告する。1講座(50分)に対して生徒5～6人を募集し、講師がオンラインで大学での学びや就職活動、現在の職業・今後のキャリアについて20～25分程度の話題を提供した後、質問や交流の時間とした。卒業生を中心に講師を募集し、5月から8月半ばまでで全24回の企画を行った(参加生徒の延べ人数は159人)。企画終了後のアンケートによれば、非常に満足度の高い結果が得られた。本稿では企画運営の報告だけでなく、コロナ禍におけるキャリア教育について議論する。

キーワード：キャリア教育 オンライン講座

1. はじめに

高校生が小・中学生と大きく異なるのは、将来の自分の『キャリア(生き方)』に対してリアリティを持って望まねばならない点である。キャリアという言葉は、職業や技能上の経験や経歴などの意味合いで使われることが多いが、学校教育における「キャリア教育」は平成23年1月の中央教育審議会答申において「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている[1]。学校はミッションとして、情報化・グローバル化・少子高齢化・消費社会等を背景とした激しい社会変化と共に生きていくために社会人として自立した人を育てることが課せられているのである[2]。

キャリア教育活動の具体例として、様々な分野で活躍する人物を学校に招き、話を聞くような活動は多くの高校で開催されていると思われる。本校では、年に2回の「特別合同授業」と年に1回の「卒業生による授業」がそれに相当する。その他にも、本校がスーパーグローバルハイスクール(SGH)の

指定を受けていた時には「ひざ詰めディスカッション」と呼ばれる企画があった。これは様々な職業の講師1人に対して生徒5～6人が文字通りひざを詰めて、将来のキャリアについて話し合う機会であった。また、学年毎にゲストを招いて行うオムニバス形式の講演会もあった。これらは規模の違いはあれ、ゲストを呼んで話をするという意味ですべて同じ活動形態であった。

本校は2020年3月2日から新型コロナウイルスによる休校が始まり、結果として5月末まで休校が続いた。この状況下では、これまでのキャリア教育の形態を使うことができず、新たな形態(オンライン・キャリア教育)を模索する必要があった。本稿は、2020年5月～8月に本校の3年生を対象に行ったオンライン・キャリア教育企画についての実践報告である。この企画を通じて、高等学校におけるキャリア教育について再考したい。

2. コロナ禍におけるオンライン・キャリア教育

2.1 企画のポリシー

コロナ休校の期間中に本校ではオンライン面談を実施した。多くの生徒は状況を理解し、自分のすべきことを全うしていたが、何人かの生徒からは将来に対する不安を聞くことがあった。我々はこの状況で行うキャリア教育に必要なことを考え、企画する際のポリシーとして、以下の4つを挙げることにした。

(1) 少人数のオンライン講座を開催

これまで本校で行われていた講演会は1講座あたりの参加人数が多く、少ない場合でも40人程度であった。また、生徒が希望する進路とマッチしない講演会もあり、生徒からの不満も少なからずあった。今回の講座では、1講座あたりの生徒数は5～6人を目安とすることで、なるべく生徒の希望に沿った話が聞けるようにすること、対話が増えること、を期待している。人数を減らした分だけ、全員に受講させるには必然的に開催する講座が増えた。1講座を授業と同じ50分に設定することで、ホームルームの時間に開催できるようにした。

(2) 講演よりも対話を重視

従来の講演会の形式では、講演者の話がメインで、質疑や交流の割合は高くなかった。本企画は「対話」を重視するために、講座時間と対話・交流の時間配分を1:1とした（講演25分、対話・交流25分）。講演者にも事前に対話の時間を確保してもらうように伝えた。

(3) 大学よりも先のキャリアを知る

単なる大学・学部選択に終わらせないこともテーマとした。大学よりも先のキャリアを知ることで、学部を選びやすくなり、選択肢が増える。実際の生徒面談においても、この学部に行った後にどんな未来があるのかが分からない、という話はよく耳にした。大学よりも先の話をする必要性から、講師は大学3年生以上で就職活動経験者を条件とした。

(4) 多様なキャリアを知る

将来の職業は大学の学部で決まらず、多様な進路があることを知ることで、大学選択にも幅が出る。我々が講師を選ぶ際には、この点も重視した。例えば、文系の法学部で学んだが就職先はIT関係、あるいは工学部で学んだが就職先は証券会社など、高校生から見れば少し変わったキャリアを持つ講師を選んだ。

企画のルールとして、生徒は一人一回必ず講座に参加することとし、興味のある生徒は何回受講しても良いことにした。

2.2 構想から実施まで

キャリア教育の構想自体は2020年2月にあった。その当時、社会人と交流する外部企画を運営していた本校生徒と一緒にキャリア教育企画を作ろうと考えたが、3月からの休校で生徒と協同で作り上げることが困難になった。4月初旬に卒業生と話をする機会があり、オンラインによるキャリア教育の話をしたところ、卒業生からも賛同が得られ、実施に向けて本格的に動き始めた。5月の連休明けに2回ほどオンラインで試行し、良い感触を得たので、職員会議で承認を得てから企画をスタートした。

講師の依頼については、連絡を取ることができる卒業生数人に声をかけ、その卒業生を通じて、企画への協力を依頼する文章を流してもらった。講師を引き受けてくれる人は問い合わせ先（渡會）にメールで連絡することにした。筆者は数人の卒業生に卒業生が作っているLINEグループへの情報拡散を依頼し、その情報が他の学年の卒業生にも拡散していったようである。

2.3 Zoomについて

Zoomはオンライン会議において多く利用されているツールの一つである[3]。Zoomは3月当初セ

セキュリティ面の脆弱性が指摘されていたが、その利便性とUI（ユーザーインターフェース）が評価されていた。我々はZoom以外にもオンライン会議が可能なツールをテストもしたが、多くのユーザーの使用を考えZoomを選択した。4月～5月にはZoomもセキュリティレベルを上げたバージョンをアップデートし、セキュリティ面での懸念はほぼ払拭された。

また、Zoomは40分間の無料使用可能でそれ以上の使用には使用料を払うか、再度会議を立ち上げて利用する、ということであったが、6月～8月まで教育機関は無料で利用できた。現在本校はライセンス契約を結んでおり、時間制限の心配は無くなった。

2.4 Slackについて

生徒への企画の案内やオンライン会議への案内は、Slackを利用した。Slackはビジネス利用で人気のあるソーシャルネットワークサービス（SNS）であり、チャット形式のコミュニケーションがメインでWebリンクや画像・写真や書類の添付なども簡単にを行うことができる[5]。本校では2018年度から

教員間の情報共有のためにSlackを導入した。2020年1月に2年生がシンガポール現地学習へ行く際に生徒全員に対し導入し、そこでのノウハウも蓄積出来ていたため、生徒と教員が協同するSNSが自然に形成された経緯がある。Slackはトピックごとにチャンネルを作ることができる。今回の企画のアナウンスなどは#進路キャリア関係、というチャンネルに情報を流し、参加希望者は教員に対してダイレクトメッセージ（DM）で連絡するよう促した（図1）。教員は参加者に対し、SlackのDMでZoomのアドレスを流し、オンライン講座に参加させた。また、講座が終了後にその講座の資料のPDFファイルをSlackで共有することで、参加しなかった生徒にも情報を提供した。

2.5 金沢大学のLMSシステムの利用

会議終了後のアンケートは金沢大学のLMSシステムを利用した。本校では2019年度から、本校の生徒にも金沢大学からネットワークIDが付与され、金沢大学の学生と同様のサービスが利用できる。このLMSにアンケート項目を作り、企画終了後に企画の評価や振り返りを記入してもらった。結果のデータはCSV形式でダウンロード可能である。

2.6 講座実施の流れ

図2が今回の講座実施における流れである。ポリシーに基づいて講師を選定し、その後、教員が日程



図1 Slackでの情報共有の場面
（上図：全体図 下図：拡大図）

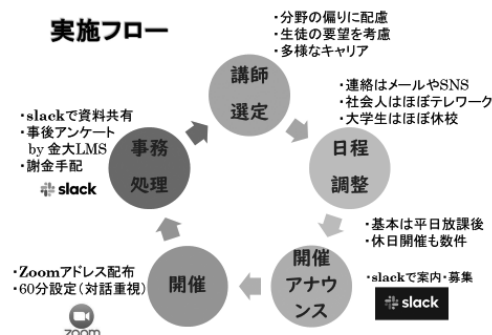


図2 実施の流れ

を調整する。当時、多くの大学がオンライン講義にシフトしていたため、大学生講師は時間の都合が付きやすかった。社会人講師はテレワークが多かったが、学校の放課後は勤務時間内と重なり、調整が難しかった。講師と日程が決まったところで、生徒に対してSlackでアナウンスして希望者を募った。開催日までに教員がZoomのミーティングアドレスを講師と生徒に配布した。実施後は生徒にはLMSを使ってアンケートを行い、講師には謝金の手続きをした。このサイクルを繰り返した。

3. 講座の実践

講師による授業当日は開始時刻の10分前にZoomのページを開き、講師と簡単な打ち合わせをした後に、生徒がオンラインで入室するのを待った。事前に企画のポリシーを伝えているが、それ以外の内容や時間配分は講師にお任せしている。

全員揃った段階で教員が講師の紹介を簡単にした後、講師の話に入った。講師の話は20～25分程度で、講師が大学生3・4年生の場合は、大学と学部でどういったことを学ぶのか、高校生のときどうやって大学と学部を決めたのか、大学後のキャリアをどう考えているか、就職活動をどう進めているか、高校生のときに知っていたらよい情報、などについて話をしてもらった。講師が社会人の場合は、大学での学びと現在の職業との関連について話をしてもらった。残りの時間を質疑応答・交流の時間とした(図3)。

基本的に講師は一人だが、中には大学が同じで学部が異なる3人が開催する講座もあり、途中までは共通の話題をし、途中からブレイクアウトセッションによってさらに3つのグループに分けて議論を深めたケースもあった。また3人の講師が事前に想定質問と、3者3様の答えを用意していたものもあった(図4)。



図3 オンライン講座の様子1

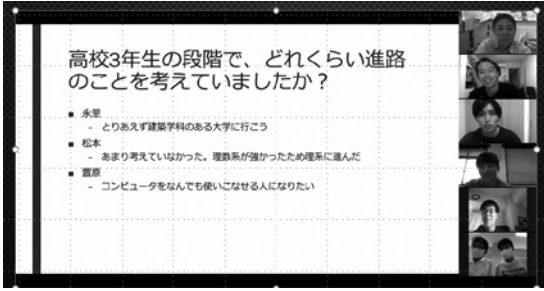


図4 オンライン講座の様子2

図5は開催した講座の一覧である。試行期間を含めると5月8日から8月17日まで全部で24回の講座を開催した。開催分野は理工系9回、文科系9回、医薬看護学系6回である。講師の年齢は22歳から41歳までで平均年齢は25.8歳(推定)であり、企画のねらいどおりの講師にお願いできた。参加生徒の述べ人数は159人であり、1回あたりの参加生徒数の平均は6.6人であった。残念ながら1回も受講していない生徒が数名いたが、逆に3回4回と参加した生徒もいた。生徒の中には現在の文系理系の選択に関係なく、講座を選んだ者もいた。本校は医学部志

No.	実施日	時間	講師名	回生	大学学部	タイトル	参加人数	担当者
1	5/8	15:00-16:00	67	理工系	67	専門を決めるということ	5	渡倉
2	5/15	11:00-12:00	67	国際教養	67	AUオンライン説明会	6	渡倉
3	5/30	13:30-14:30	63	東大理工→工学部	63	理系学部からの文系院進	6	渡倉
4	6/4	18:30-20:30	64	近大理工→工学部	64	海外留学・自分の強みの形成	7	尾崎
5	6/5	15:30-16:30	63	関西大→工学部	63	法学部に進学してゲームプランナーになった人の話	7	渡倉
6	6/6	11:00-12:00	67	東大理工→理学部	67	生体に関心すること	8	尾崎
7	6/9	15:30-16:30	68	東大理工→工学部	68	文系として学ぶ	12	森崎
8	6/12	15:30-16:30	66	名大理工	66	医学部とその先の進路	15	尾崎
9	6/12	15:30-16:30	63	東大理工→東大理工	63	博士課程という選択	5	渡倉
10	6/15	15:30-16:30	61	東大理工→昭和大学整形外科医	61	整形外科医って？	5	尾崎
11	6/19	15:30-16:30	68	京都大学理学部数理解析学系	68	数学科ってどんなことをするのか	3	森崎
12	6/24	15:45-16:45	61	東大理工→正妻工芸	61	大学生活、自分の専攻の概要、進路選択、今の職業	4	尾崎
13	6/25	15:45-16:45	65	東大理工	65	進路選択	9	渡倉
14	6/27	13:30-14:30	67	東北大学	67	医学部受験の志望校選択と、その後のキャリア形成について	10	渡倉
15	6/30	15:40-16:40	65	金大理工	65	大学生法、実務法とは、学術振興会	3	渡倉
16	6/30	15:40-16:40	62	東大理工→獣医学部	62	東大理工→獣医学部	5	尾崎
17	7/2	16:15-17:15	68	東大理工	68	研究への進路・道を思い描いて	4	渡倉
18	7/17	13:30-14:30	68	九州大学	68	大学生活、自分の専攻の概要(土木工学、都市計画)、卒業後の進路	4	森崎
19	7/21	15:30-16:30	62	横浜→ワーホリ→不動産	62	横浜→ワーホリ→不動産	4	尾崎
20	7/22	15:30-16:30	64	近大理工→工学部	64	法律の話	10	森崎
21	7/23	11:00-12:00	64	石川薬品看護→金大看護	64	看護系の選択について	4	渡倉
22	7/30	15:30-16:30	61	岡山大学→金大理工(日本人フェロー)	61	岡山大学→金大理工(日本人フェロー)	7	尾崎
23	8/3	19:30-20:30	62	慶應(法)→AGC	62	努力すれば必ず結果は出る！	12	尾崎
24	8/17	17:00-18:00	66,67	東大理工→東大理工	66,67	理工系のキャリアと大学院での研究活動について	4	渡倉

図5 講座の一覧。

※個人情報保護のため講師名は伏せてある。

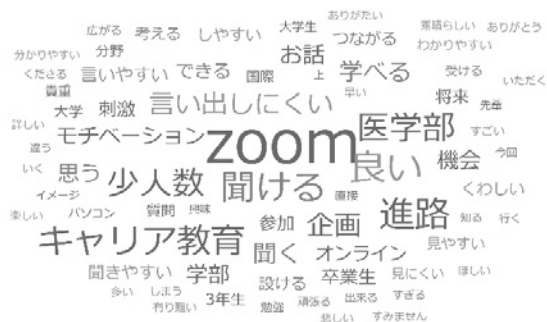


図9 自由記述欄のワードクラウド分析（スコア順）

図10は共起キーワード分析で、文章中に出現する単語の出現パターンが似たものを線で結んだものである。出現数が多い語ほど大きく、また共起の程度が強いほど太い線で描画されている。例えば、右上の語のつながりから「企画が良いと思う」、そのすぐ下の語は「進路を考える機会」、左下の語では「少人数が質問しやすい」、などを読み取ることができる。また、「モチベーション」が「勉強」と「つながる」と繋がっていることもわかる。

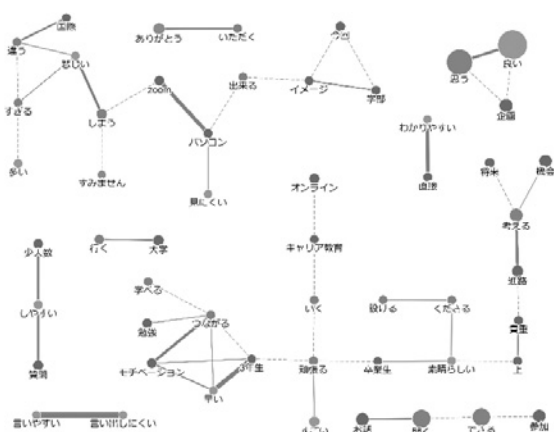


図10 共起キーワード分析の結果。文章の中で多く使われている語の繋がりを表す。

上記の分析は、あくまでも語と語の関係性を表す分析方法である。それらの語が本当はどんな文脈で使われているかを知るには、元々の文章を確かめる必要がある。生徒の感想の中で印象的なもの、こちらのねらいと合致した文章を幾つか抜粋して紹介する。

- ・卒業生によるものなので親近感が湧き、「私も頑張ればこのような凄い人になれる！」とすることができました。（医学系）
- ・医学部に入ることがゴールではなく、その後に何をしたいか考える大きなきっかけになりました。（医学系）
- ・自分で調べるだけでは分からないことが多い中で、実際に経験者や現在その立場にいる方から話を聞けることはとても貴重な経験（理工系）
- ・工学部へ進学した後の進路はどうなるのか全くイメージが掴めていなかったで、とても参考になりました。（工学系）
- ・大学ばかりに目がいってしまうこの時期だけど、そのさらに先の選択肢について知れて良かったです。（文学系）
- ・3人の大学生の意見を聞くことができ、贅沢なキャリア教育が受けられて良かった。（薬学系）
- ・予想以上に聴きごたえがあった。初めはあまり乗り気じゃなかったが、本当に有意義な時間だったと思う。（医療系）
- ・大学生活が一層楽しみになった。国家公務員の職務は、民生の安定や良好な国家関係に直結し、それ故に格別慎重な判断・決定が求められる重要な仕事であることも分かりました。（人文系）
- ・色んな事に対するアグレッシブさを見習おうと思いました。金沢の中で収まって満足してしまいそうだったので、もう一度考えて見ようと思いました。（理工系）

4.3 ネガティブなコメントについて

感想文の中にはネガティブなものも含まれていたが、大きく3つに分類できた。

①接続の不具合・環境不備：6件

オンライン講座の基本的な問題であるため、改善が必要である。具体的には、本校のPCルームはZoomの調子が悪く、うまく動作しなかったことが

挙げられる。※生徒は自分のスマートフォンで対応した。また、同室でマイクをオンにするとハウリングが起り、講演の開始が遅れたり、質疑が滞ったりしたことがあった。ただ、これは主催者がある程度コントロールできるものもあるため、主催者が経験を重ねれば、問題なく運営できると思われる。

②もっと対話をしたかった：2件

これは文章としてはネガティブであるが、この意見を書いた生徒はブレイクアウトセッションが充実して時間が足りないということであった。企画自体は充実していたことの裏返しであると思われる。

③分野に偏りがあった：2件

我々は事前に生徒にアンケートを取り、希望の分野を調査したが、理系は医薬看護系が多い傾向にあった。本校は学年の3分の2が理系であり、その半分程度が医学部志望であるため、自然に偏りが生じる。医学部志望でない生徒から見れば、医学系に偏っていると感じられたかもしれないが、企画側として問題はなかったと考えている。

5. オンライン・キャリアの効果

この企画による効果を、生徒、講師、教員という3者の視点からまとめる。

5.1 生徒の感想から

生徒にとっては、漠然とした大学・学部での学びやその後の進路について、リアリティのある情報が得られたことが大きい。これにより、やる気の喚起や不安の解消につながったと思われる。また、同じ学歴、同じ職業に卒業生という肩書が加わると通常よりも説得力が増す。過去に同じ環境で学び、同じような悩みを経験している先輩だからこそ、アドバイスを受け入れられ、刺激を受けた生徒は多かった。講座による刺激は一時的なもので、多くはすぐに忘れ去られてしまうものかもしれない。しかし、11月に開催された本校の研究大会において何人かの生徒からは、「今回の講座が行動変容するきっかけになっ

た」という意見を聞くことができた。それだけでも講座の役割は十分に果たされたと思う。

今に始まった問題ではないが、高校生にとって大学・学部選択は未知の部分が多く、悩みの種になっている。当然ながら、職業と直結する学部（医学部や薬学部、教育学部など）は想像し易いが、その他の学部の違いを明確に理解している高校生は今も昔も少ない。現在はネットを利用すれば、進路の情報を簡単に調べることができるが、それでもよくわからない、という言葉を目にする。それはネットで調べた情報だけでは、リアリティ（現実味）が足りないからではないだろうか。また、ネットによる情報過多が原因で調べたいことに到達できないことも考えられる。高校生が自身に情報を取り込むには、直接高校生に語りかける機会が必要であろう。

5.2 講師の感想から

講座の前後に何人かの講師と話し合う機会があったため、その時の意見をまとめておく。

講師にとってのメリットは、高校生徒との交流がコロナ禍にあっては新鮮だった、という意見が多かった。

6月～8月は社会人もリモートワークが大半で、大学生もオンライン授業だったため、閉塞感を感じていたようである。実際に多くの社会人講師は自宅から普段着で今回の企画に参加していた。

卒業生の講師からは自らの高校時代の反省を生かしてほしい、高校にお世話になったから恩返しをしたい、という意見も聞かれた。また講師として参加することで、自分を見つめなおす機会になったという意見もあった。

5.3 教員の感想

今回の講座により、生徒に進路に関する情報だけでなく、刺激や多様な視点を提供できたと感じている。また、講師の多くが卒業生だったため、卒業生

の成長を見ることができた。特に、担任していた生徒が、当時の不安や悩みをどう考えていたかを知ることができた。この経験は教師の成長ややりがいにつながる感じた。

教員は多くの大学生が経験するような就職活動をしていない。教員希望の学生は、教員採用試験が就職活動の一環であるため、多くの職種を調べる必要がない。そういう意味で職業に対する理解が不足する。今回のような企画を教員が経験することで、様々な職業の話を聞き、生徒の進路指導に役立てることができる。高校教員は高校生にアドバイスする立場であるから、多くの職業について多角的に知る必要があるだろう。

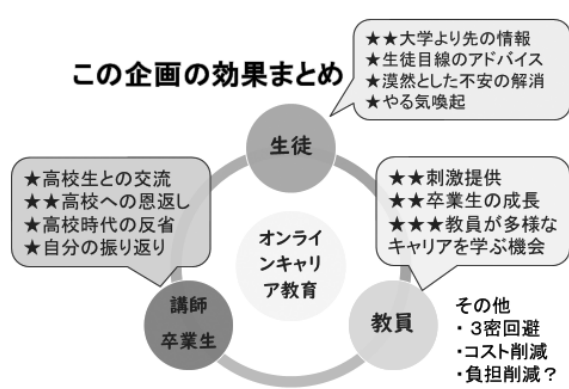


図10 企画の効果のまとめ

6. 議論

今回我々は5月から8月までで24回企画したが、これを次年度以降も継続するのは難しいだろう。最も苦労したのはコミュニケーションコスト（メールのやり取り、日程・時間の調整）である。学校が再開されると行事や会議が入り、調整が困難であった。今回の場合、大学生は殆どがオンライン授業になっていたため、比較的時間の融通が利いていたが、通常に戻ったときには調整がさらに難しくなることが予想される。

今回のように「少人数で行うポリシー」を貫くと、多くの講座を開設することになり、教員の負担が大

きい。講座の回数を減らせば負担は減るが、対話の機会は少なくなる。いずれにせよ、キャリア教育を行う際のポリシーの設定が重要であり、それに基づいて計画を立てて進める必要がある。一つ言えることは、オンラインでなければここまでの数の講師に話をしてもらうことはできなかったであろう。従来のようにゲストに来校してもらい、会場の用意や片付けなどの手間や費用を考えると、オンライン企画の負担は圧倒的に少ない。講師の確保についても、今後講師の人材バンクのようなものを作り、そこから講師の依頼をすれば、コミュニケーションコストを減らすことは可能である。

形式はどうであろうとも、キャリア教育というのが、単なる大学・学部紹介でなく、自分のキャリア（生き方）を見据えるための教育となることが本質である。これは文部科学省の「高等学校キャリア教育の手引き」をはじめ、多くの文献にも書かれている[2, 6]。そのために学校は単発の企画ではなく、長期的な視野を持って取り組まねばならないだろう。

高等学校におけるキャリア教育に関する研究は数多く存在するが、実践例の報告が少ない。これには①大学研究者は調査しているが実践に関わっていない、②実践者（高校教員）が報告していない、という2つの問題が考えられる。キャリア教育の重要性は多くの研究者が理解しているが、現場の教員には伝わっていない。一方で高校教員は「キャリア教育」を「進学指導・出口指導」に変換してしまっているケースもある[6]。大学の研究者と現場の教員との連携が必要である。これは学校におけるキャリア教育全体の課題である。

7. まとめ

今回、オンライン・キャリア企画についての実践結果を報告した。関わった3者（生徒・講師・教員）にとって有益な企画であることが感じられた。今後どうやって継続・発展させていくかがこれからの課

題である。

学校教員がすべきことは、生徒にキャリアを考える機会を提供することである。教員は「キャリア教育」による理解を深め、力を入れる必要があると感じている。

謝辞

本研究について有意義な議論をしていただいた、金沢泉丘高校教諭の井川健太氏、本校卒業生で67回生の泉和真氏に感謝する。この場を借りて、この企画に賛同、協力していただいた講師のみなさまと講師を申し出てくれた卒業生のみなさまに感謝いたします。

参考文献

- [1] 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1303768.htm
- [2] 高等学校キャリア教育の手引き, 文部科学省, 平成24年
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1312816.htm
- [3] Zoomのウェブサイト <https://zoom.us/>
- [4] Slackのウェブサイト <https://slack.com/intl/ja-jp/>
- [5] User Local AIテキストマイニングのページ,
<https://textmining.userlocal.jp/>
- [6] これからの時代に求められる高等学校のキャリア教育, 河合宏之, 人間生活文化研究, 2019, No.29, pp93-99